

弱い人たち

近 藤 勝 志

序

ダニエル・デフォーの作品を読んでいつも気にかかることは、登場人物が、特に男性に顕著であるが、動機は、たとえば孤児・捨て子に負わされた過剰な周縁性とか、それぞれ置かれた状況によって異なるにしても、国外に活路を開こうとする者が圧倒的に多いことである。本論で考えてみたいことは、デフォーが主として描く名前を持たない人物たちや家庭崩壊者のイギリス内外における生き様が語るものである。なお、イギリス人の国外脱出について一言ふれておけば、底辺層のみならず上・中流階級も含めたイギリス人、ひいてはヨーロッパ全体による世界の地図化、植民地争奪の是非がデフォーの脳裏をかすめるようなことは決してないことをあらかじめことわっておきたい。さて、国外脱出云々の前に当時のイギリス社会がデフォーの描く人物たちにどのように映っていたかをまず見ておきたい。参考になるのが、18世紀イギリスの画家ウィリアム・ホガースの『乞食オペラ』を中心にした一連の風刺作品である（デイヴィッド・デイビーン、正木恒夫）。『乞食オペラ』はジョン・ゲイの作で、セリフ劇に歌をまじえたイギリス特有のバラッド・オペラである。ホガースはジョン・ゲイの戯曲の一場面を描く。注意したいの

は、牢獄と見紛う舞台上に本来客席にいるはずの観客が俳優と並置されていることである。そこでは、ポリーとルーシーは、ふたりがともに愛している辻強盗であり、かつ盗賊の首領であるマクヒースを許してくれるよう、父親たち（看守と故買人）に嘆願している。ホガースは、マクヒースを通常の強盗の服装ではなく紳士の上品な衣装で仕立て上げ、舞台上の貴族の観客を、下層生活を送る犯罪者と同じ次元に配置することによって、社会的区別をぼかしている。この絵の風刺のポイントは紳士を盗賊と同列に置くことで、その等質性を示すことである。一種の共犯者と考えられる彼らが牢獄の壁を思わせるセットの中に閉じ込められていても不思議ではない。不可解なのが、舞台上の黒人少年の存在である。舞台上の黒人少年は少年の雇い主の植民地との繋がりとか、さまざまなことを想起させる。結論を急げば、この黒人少年は植民地創世神話、さらにはイギリス・ブルジョア社会という牢獄の実相を見つくず観察者の役割を与えられているということである。

ホガースに牢獄と見立てられたイギリス・ブルジョア社会に負の属性に囲まれた人物がとどまり続けた場合の悲惨さはチャールズ・ディケンズの『鐘の精』（クリスマスもののひとつ）に出てくるトウビー・ヴェックの赤貧洗うがごとき生活が如実に物語っている。彼は60歳を越した老人で、古い教会の前を常駐の場所としており、いろんな人からの依頼を受けて手紙や荷物を運ぶ公認運搬人である。仕事がないため、食事もままならないのに、はたから「平均年齢以上」とか「穀つぶし」といった言葉を浴びせられると、生きていることで誰かの邪魔をしているよううしろめたい気持ちにかられてしまう。

I 科学上の小道具とタブラ・ラサ

ここでイギリス人の国外脱出の条件整備の主だった理由をふたつ挙げておきたい。エンゲルハルト・ヴァイグルが指摘する科学上の小道具の発達とジョン・ロックが唱える *tabula rasa* (価値転覆) のふたつである。まずエンゲルハルト・ヴァイグルの指摘から見ていきたい。ヴァイグルによれば、デフォーの描く時代、つまり17世紀後半から18世紀初頭にかけては科学上の新しい小道具が近代の自己意識にとって決定的な役割を果たした時代であったということである。たとえば、ロビンソン・クルーソーの航海との関連で言えば、大洋における船の位置測定に緯度だけでなく経度を利用し始めたことは、近代初期における最大の知的挑戦のひとつであった。経度測定用の時計の正確さと耐久力の向上は大航海を可能にし、その結果として、アメリカの植民地化が進んだこととか、やや時代は下がるが、キャプテン・ジェームズ・クックによる「南方の大陸」、つまり今日のオーストラリアの探索などが一例として挙げられる。

当時の精神風土の変遷に関しては、時代は前後するが、ガリレオ・ガリレイの望遠鏡とか顕微鏡に代表される光学的な小道具の使用が神学によって確立された境界を乗り越えることを可能にした。中世の人間に関して言えば、中世の人間は創造主としての神の慈悲と叡智が自分に向けられていることを信じることで、世界の意味を自己と関係づけることができたと言える。しかしその後、アメリカの植民地化とか、望遠鏡による新星の発見などによって、人間を取り巻く空間自体が飛躍的拡大を続ける時代が到来したということである。このことを言い換えると、神の概念に重大なずれが生じたために、人間が神によって「見られる」存在から自分の目で世界を「見る」主体へと移行する時代になったということである。今までは人間が手を出してはいけない神の領域、つまり「不可視」の領域があったわけであるが、そこへ「好奇心」と直結した人間

の目が分け入りどんどん世界を「可視」のものに変えていったということである。そうした前提に立つと、ロビンソン・クルーソーが「中くらしいの生活」という現状維持を迫る父の説諭に背いて自由を求め、文字どおり世界を自分の目で「見る」ためにイギリスを発たずにいられなかった理由が見えてくるようである。

ヴァイグルの指摘は国外脱出熱の普遍化を科学的側面から裏付けていると言える。しかし国外脱出を含めた、デフォアの描く人物たちに見られる静止なき行動についてはヴァイグルの指摘以外の別の要因が登場人物の意識の奥底に渦巻いていたことも指摘しておきたい。このことを一言でまとめれば虚無感とそこからの逃走がデフォアの作品の重要なテーマのひとつということである。たとえば、クルーソーが老齢になっても放浪にこだわること、『ペスト』のH.Fが好奇心のため、ペストの蔓延するロンドン市街を徘徊すること、『モル・フランダーズ』ではモルが貧困に対する不安を口実にして始めた結婚・同棲・盗みを肉体の衰えあるいは入牢・流刑という外的な要因によらないかぎり、止めないことがその一例である。3人に共通する現象は、それぞれの行為は放浪癖、好奇心、虚栄心・貪欲に基づいたものであるが、3人が途中での停止など考えずに、生命の危険もものかは、断固初志を貫徹しようとするのである。何が3人を死をも辞さない無謀な行為に駆り立てるのであろうか。この問題についてのジャン・スタロバンスキーの言葉は示唆的である。つまり、18世紀はジョン・ロックの唱える *tabula rasa* (価値転覆) の時代であり、魂は感じる瞬間にしか、あるいはさらに感覚の残してくれた痕跡を反省が能動的に比較するときしか、存在を自覚しないということである。一言でいえば、人間の尺度をその内面だけに求める態度ということであり、そうした態度の孕む緊張感が3人を果てしない活動へと駆り立てるのであろう。

特にその傾向が顕著に見られるのが、『その後の冒険』におけるクル

ーソールの言動である。クルーソーは35年ぶりに帰国して、今は家族にも恵まれ、経済的にも安定した生活を送っている。まさに父の言った「中くらいの生活」を享受しているわけである。さらにクルーソーは、「すでに老齢に達しかけていること、資産をこれ以上殖やす必要のないこと、出かけることは神の思し召しではないし、私の義務でもない」という結論を導くことによって妄想に打ち克つたと語る。61歳になったクルーソーにとって、上述したように、自分を距離をおいて見つめさえすれば、放浪癖の芽をことごとく摘むことは可能なようである。しかし『その後の冒険』の冒頭部分において、クルーソーは放浪癖を「業病」(a chronic Distemper, p. 112) に喩えることで、放浪癖の癒しがたいことを暗示している。

無為な生き方を避けるためなら自殺行為も辞さないのが『ペスト』のH.F.の生き方である。ロンドン市民は1664年の12月前後に始まった原因不明の恐怖に大混乱をきたす。天罰なのか自然現象なのかも判然とせず、ペスト菌の正体どころか伝染経路の推定さえおぼつかない当時としては、対策の施しようがない。ロンドン市民の6分の1が犠牲になるなか、生き残りのため市民が金銭の受け渡しや、食料の入手等に可能なかぎりの予防手段を講じたことは言うまでもない。当局も特定の家族のこうむる深刻な重荷より、公益を優先するために家屋封鎖を敢行する。つまりロンドン全体が殻の中に閉じこもって理不尽な疫病の盛りが過ぎ去るのをひたすら待つわけである。

ロンドンの風貌が一変していくなか、H.F.はオールドゲイト教区の教会墓地に通い詰め、死体運搬車から穴に投げ込まれる死体の数を執拗に数える。9月4日に出来上がった穴は2週間後の20日までには1114個の死体のため小山のように盛り上がったことまで調べ上げている。感染の危険も顧みず、死者の数を1114体まで数えるというのは尋常ではない。何が一体ここまでH.F.に墓地通いをさせ、死者の数を数えさせるの

であろうか。H.F とは昵懇の間柄になっている墓堀人夫は H.F に「自分たちが危ない命がけの仕事をしているのも実は自分たちの務めだからだ。命を失うかもしれないが、できるなら助かりたいと思っている。だが、あなたは何もそうしなければならない義理はないはずだ、たかが物好きじゃないのか、そんな好奇心が危ない真似をする口実になるなどとは、まさかあなただっと思っていてるわけじゃあるまい」(*A Journal of the Plague Year*, p. 54) と忠告をしてくれる。墓堀人夫は H.F の好奇心のもたらす危険な結果をこのように諭す。ペストの猛威から逃れることは不可能に近いと分かった後でも、H.F は松明とベルマンの鳴らす鐘の音とともに死体運搬車が近づいて来ると、是が非でも見たいという欲望に抗しきれなくなる。これでは H.F の好奇心もクルーソーの放浪癖同様、病氣と看做さざるを得ない。

さて理不尽という点で共通するのがモル・フランダースの、貧困に対する不安である。幼少時の不安定な生活体験に基づいた不安が生涯モルにまとりわりついている。しかしここで問題にしたいのは、モルの不安は目前の貧困ではなくて、常に遠い将来の貧困を視野に入れていることから生じることである。モルの貧困に対する不安の解消がむずかしいことは、モルの考えている貧困の中身が不変でないことから生じている。つまり必要 (Necessity) からいつの間にか貪欲 (Avarice) へのすり替えが行われているからである。モルの貧困に対する不安は結局永久に癒されることのない不安になることは必定である。

II 孤児・捨て子

デフォーの描く世界では、孤児・捨て子の物語が語られることが多いことは先述したとおりである。代表例はシングルトン船長とジャック大

佐の2人である。2人の共通点は土地・歴史・伝統とは全く無縁の、人間というよりむしろ道端の石塊のような存在にすぎないということである。シングルトンはジャック大佐同様孤児であり、教育の機会を逸しているためか、前後半を通じて国内に留まるかぎり、男らしい生き方は叶わない。シングルトンの場合、分かっていることは、2歳の頃に誘拐され、まず女の物乞いに売られたということだけである。つぎにジブシーに12シリングで買い取られ、6歳まで一緒に各地を放浪する。その後12歳になるまで教区の厄介者として養育される。このように幼少時から家族・家庭に恵まれられないだけでなく、名前すら定かでない。Bob Singleton という名前も洗礼名ではなく、単なる通称にすぎない。シングルトンが帰属するものを持たないことは、12歳の頃、乗っていた船がポルトガル船に拿捕されリスボンに係留中に、ポルトガル人老パイロットとの間に交わされるつぎのような会話からも明らかである。

「船を降りなさい」

「どこへ行けばいいですか」

「どこでもいい。なんなら、故郷へ帰りなさい」

「どうして帰らなければいけませんか」

「身寄りはないの」

「ありません。あの犬だけです」

と言って、犬を指さした。この犬は、さきほど肉片を盗んできて私のところへ置いてくれたので、それを食べたところだった。つまり、この犬だけが親友で、私に食事の世話をしてくれていた。(Singleton, p. 4)

このように少年期までのシングルトンは、アイデンティティの不確かなモノのような存在にすぎず、社会的な弱者であることが強調される。しかし少年期に船員としてイギリスを離れ、青年期に達するや、17、8

歳という年齢にもかかわらず仲間から「キャプテン」と仰がれ、途中からアフリカ大陸の横断旅行を取り仕切る。横断旅行中、彼らは物資の運搬手段に悩まされる。シングルトンは住民との間に争いを起こし、争いの收拾にかこつけて、住民を10余人捕獲し、奴隷化することで、ガイド役とか他の地域の住民との折衝、物資の運搬役をさせることを提案する。結果的には、60人前後の屈強な若者の捕縛に成功する。さらに戦闘中に負傷した王子の怪我を完治させることで、王子に捕縛した住民の間接統治を担わせると同時に、住民の信頼を得ることに成功する。被征服民の自発的服従の典型的なエピソードである。目的地である黄金海岸（今のガーナ）近くでは、ギニア会社のイギリス人のすすめにより植民地貿易の象徴である大量の砂金などの資産を入手する。2度目の航海では、不等価交換とかそれ以上の交換（つまりただで入手すること）および略奪行為を繰り返すことにより莫大な資産を手に入れる。功成り名を遂げた（？）シングルトンは指南役のウィリアムともどもアルメニア人商人を装い、ヴェニスからウィリアムの妹に都合5,000ポンドもの送金をする。莫大な資産形成により商人としてのアイデンティティを確立して無事帰国を果たし、送金済みのウィリアムの妹と結婚することで、英国内に待望の「ホーム」を築いても、英国内では国外で確立した商人としてのアイデンティティを封印したまま隠微な過去を隠すため英語を捨て外国人として生きることを余儀なくされる。つまり、結婚のうちに安定と静止を見い出せない彼らにとって「ホーム」は永遠に用意されることはないわけである。

もうひとつの例はジャック大佐である。ジャックの幼少時から見ていきたい。ジャックは実の親の下で育てられない事情のため、乳母によって育てられる。風聞では紳士階級の出身ということである。乳母の言葉によれば、born gentlemanということになるわけであるが、ジャックにはそれを経済的に裏付けるものが何も用意されていない。ジャックは自

らの努力によって bred gentleman をめざすことになる。born gentleman であろうが bred gentleman であろうが、教育を受けていないジャックにとって「紳士たれ」という父の遺訓の理解・実践は不可能に近い。ジャックの生涯は当然のことながら、父の遺訓に翻弄されることになる。ジャックの前途に立ちはだかる苦難など知るよしもない乳母はジャックより1歳年上の実の子供よりジャックを上位に位置づけるためジャック大佐と命名する。因みに実子はジャック大尉、もう一人の里子は少佐であった父親に因んでジャック少佐と命名される。乳母はジャックが10歳、キャプテンが11歳、メジャーが8歳の時に死去する。残された3人は寒さから身を守るため、冬はガラス工場の灰捨て場、夏は番屋や店先を住処にしながら、掏摸などの悪事によって糊口を凌ぐ。悪事が生業の、まさに社会の「灰」のような存在として生き続けるわけである。

ジャックは乳母の死後、生活のためとはいえ、悪友のウィルとかふたりのジャックらと悪事を重ねる。15歳近くになっても、掏摸を大罪とは思わず、「仕事」(Trade)と看做している。しかしジャックは父の遺訓を忘れることはない。ジャックはウィルが盗んだ懐中書簡入れの中にあつた小切手(Bills)の返却をウィルに理詰めで迫る。自分らにとっては全く価値がない小切手も持ち主にとってはそれをなくすことは全財産の喪失につながるかもしれないと、涙を交えて説得するわけである。ウィルは当初足がつきやすい盗品の返却に尻込みするが、ジャックの熱意にほだされ返却に同意する。

ウィルから返却方法を伝授されたジャックは紳士との交渉のため税関に向かう。書簡入れの中身の確認後、報奨金の25ポンドの確認を求められてもジャックには勘定の仕方が分からない。ギニー金貨とポンドの換算に至っては全くのお手上げ状態に陥る。金額の確認後、ジャックは紳士から名前の確認をされ、ジャックですと答える。不審に思った紳士はつぎに名字(Sir-Name)の確認を迫るが、ジャックは逆に「名字って

何でしょうか」と反問する。あきれた紳士はジャックの他に何か付いていないかどうかと続ける。それに対し、ジャックは世間からはカーネル・ジャックと呼ばれているので名字とやらは「カーネル」ではないでしょうかと答える。紳士はつぎに両親の有無に話題を転じるがジャックの返答は名字以上に要領を得ない。

ジャックの兄弟の行末は過酷をきわめる。ジャック大尉は13歳頃子供供の誘拐でニューゲート監獄入牢、流刑地先のヴァージニアから帰国後は、犯罪を重ねたすえ絞首刑。ジャック少佐はニューゲート監獄脱獄後フランスへ逃亡、最後はパリで車裂きの刑に処せられる。ジャック大佐もシングルトン船長同様イギリス社会から押し出されるかたちで仕方なく海外に活躍の場を求める。ジャックはスコットランドからの帰路、所属部隊がニューカッスル入りすることを知る。ニューカッスル入りすれば今までの悪行がらみで逮捕は必定とばかり、脱走を敢行する。しかしニューカッスルで酒場の女将と船長に騙され、ヴァージニアの農園に5年間の年季契約奉公人として売られてしまう。不本意な渡航ではあってもヴァージニアへ到着したジャックの頭の切り替えは早い。ジャックは年季契約奉公人として5年間辛抱すれば、浮浪者、掏摸それに軍人稼業から足を洗い真っ当に生きることが可能であると、自らを鼓舞する。このように、遠い植民地や遠隔地に移され、活動を開始するや、土地・歴史・伝統を持たない彼らにとって、手段の是非を論ずる余裕のないことがかえって蓄財に役立つ。莫大な蓄積によりそれなりのアイデンティティを確立し、それによって国外では農園の主人として「男らしさ」を獲得する。しかし帰国の都度、海外で確立されたアイデンティティは揺らぎをきたし、シングルトン同様過去の悪業を隠すため似非英国人として暮らざるを得ない。つぎにジャックの結婚について一言ふれておきたい。ジャックは生活が安定するにつれ上昇志向に突き動かされ、それに見合う妻を求め都合4回も結婚するが、田舎出の4番目の妻との結婚以外は

ことごとく不首尾に終わる。不首尾の原因は「私は愛の問題については全くの子供だった。女性については、ヨーロッパの同年輩の誰よりも疎かった。」(*Colonel Jack*, p. 186) という述懐に裏打ちされるように、ジャックの精神面に起因すると言っても言い過ぎではあるまい。

III 国内組

つぎに注意したいのは、デフォーの描く人物のうち、国内にとどまる男たちである。ここで取り扱うのは、結婚を日々の糧と看做すモルが結婚相手に選ぶ男たちである。彼らは先述したトウビー・ヴェックほど打ちひしがれているわけではないが、どこか欠けたところのある男たちである。個々の男たちの検討に入る前にまずモルの夫選びの基準を見ておきたい。モルは罪人の子としてニューゲート監獄で生まれた孤児である。孤児であるモルは養育院生活からの自立を急いでいる。モルは自立した女性の一例として「奥方」(*Gentlewoman*) に憧れる。モルは奥方の定義を何度も試みる。

私の奥方になるというのはひとりで働けて、あのこわいお化けの奉公に行かずとも暮して行くのに十分なお金がとれるというだけのことでした。(*Moll Flanders*, p. 50)

その後モルは周囲の質問に答える形で「奥方」の具体例を披歴する。それに対して養育院の老保母は知り合いを例に挙げつぎのように「奥方」について語る。

「かわいそうに、」と老保母はいます。「そんな奥方ならすぐになれ

ますよ。あのひとは身持ちが悪くて、ててなし子が二、三人あるのです。」(Ibid, pp. 51-52)

モルの「奥方」はこの先、老保母の発言どおり多義的になる。皮肉なことに、モルのその後の人生はモルの願望とはうらはらに老保母のいう「奥方」人生をなぞることになる。モルは最初の夫であるコルチェスターのロビンと死別したあと、稚拙な奥方願望をひっさげて夫選びに邁進する。モルは夫となるべき男性の品定め基準をつぎのように語る。

商人がいやというわけではありませんが、商人でも、実のところ、同時にひとかどの紳士でもあるような人を夫にしたいのです。例えば私が夫を裁判所とか劇場に連れて行こうとする場合、夫が剣を帯びても似合い、どの男にもひけをとらぬくらい紳士らしい様子であってほしいのです。服に前掛けのひものあとや、かつらに帽子のあとが見えたり、剣を帯びるとまるで人間のほうが剣にくくりつけられたように見えたり、商売が顔付に出ていたりするような人はごめんなのです。ところが、とうとうこの紳士商人という水陸両生類みたいな人を見付かりました。(Ibid, p. 104)

W. M. サッカレーの『虚栄の市』に出てくるドビンの父親の荷馬車とかアミーリア、オズボーンの馬車の場면을髣髴させる引用である。モルが夫に選んだのは、道楽者、紳士、商店の主それに乞食を一緒にしたような呉服屋である。結婚後、モルと呉服屋の夫は6頭立ての馬車を用立て、御者、左馬騎手、上等な揃い服の従僕2人、さらに乗馬の紳士と別の馬に乗り帽子に羽毛をつけた小姓を雇ったうえ、伯爵夫妻気取りでオックスフォード方面を旅行、大枚92ポンドほどを瞬く間に散財する。夫は2年3か月ばかりで破産、逮捕後債務者拘留所に収監される。しかし執

行吏の事務所から何とか脱走後フランスへ高飛びし、その後消息を絶つ。モルは夫との離別後夫をしきりに紳士呼ばわりし、満足感を口にするが、夫はモルの稚拙な奥方願望に付け込んだ詐欺師に過ぎない。トウビー・ヴェックは老いたとはいえ、公認運搬人としての矜持を保っていた。食糧雑貨商であるドビンの父親は荷馬車を商品の運搬に用いながら、階級という境界の越境をめざしドビンを上級学校に進学させ、最終的にはインド駐屯の将校（中佐）に仕立て上げることに成功した。しかしモルの結婚相手の呉服屋はホガース的な似非紳士にすぎない。

呉服屋の夫と別れた後、モルはつぎに異父弟とは知らずに誠実なヴァージニアのタバコ農園主と結婚する。モルはヴァージニアで安定した生活を送っているさ中に、義母の身の上話から偶然、義母と自分は実の母娘であること、当然のことながら、夫とは姉弟であることを知り驚愕する。モルは打算が働き、3年間沈黙を守る。しかし真相を知らされた誠実な弟は問題の処理策として2度も自殺を試みる。ひ弱な弟と別れたモルは帰国後、プリストルからバースへ向かい、バースで病気の妻を親戚に預け静養中の紳士（complete Gentleman）と結婚する。しかし病気を機に悔俊した紳士はモルとの仲を清算する。

バースの男性と別れたモルは42歳になり、先述したように前途に近づいて来る貧困の恐ろしさが心に重くのしかかってくる。また相談相手がいらない女性を地に落ちた財布とか宝石にたとえることで、安定した生活の必要性を強調する。安定した生活を求めるモルがつぎに関係を持つ男性は、資産管理が縁で知り合った私欲のない誠実な銀行員である。しかし銀行員の妻は夫の不在中に陸軍の将校との間にふたりの子供をこしらえたうえ、さらに呉服屋の奉公人と駆け落ちをしたということである。銀行員はモルに自分は間男されたと告白するが、モルは逆に間男される男性は誠実だと言って銀行員を励ます。妻との仲を清算した銀行員はモ

ルに結婚を申し込むがモルは愛情など感じていない銀行員を釣人が針にかかった鱒を焦らすように、いわば宙づり状態にしておく一方で、風采が立派で紳士然としたランカシャーの男性との交際を始める。

モルは銀行員を宙づり状態にしたままある夫人の紹介で会った男性に一目惚れする。ランカシャーの男性がつぎのように紹介される。

風采は実に立派な紳士で、背は高く、体のつくりはよし、ものごしは何ともいえぬほど立派でした。そして自分の持っている庭園のこと、馬のこと、猟場の番人のこと、山林のこと、小作人のこと、召使のことなどをまるで自分が荘園の大邸宅にいるようにいかにも自然に話しましたので、私もそれらを自分の身の周りに見るような心地がしました。(Moll Flanders, p. 195)

モルは紳士然としたランカシャーの男性の外見・物腰に惑わされる。さらにランカシャーの男性の語る絵空事に目が眩んだモルは誠実な銀行員に思いを馳せる余裕もないままランカシャーの男性との結婚を急ぐ。しかし紹介役の婦人は実は夫の情婦、夫のわずかな手持の金は結婚の諸費用で底をついたことが判明し、また振出しに戻ることになる。モルはランカシャーの夫との間にできた子供を産婆 (Mother Midnight) の計らいで里子に出した後、宙づり状態しておいた銀行員との結婚に踏み切る。モルは銀行員との結婚生活を安全な港での停泊にたとえ、夫のことを「物静かな、分別のある、真面目な人で、品行方正で、優しく、誠実で、仕事には熱心で間違ったことは嫌いでした」と説明する。しかし夫は、モルから見れば致命的な一撃とは思えない資金の焦げ付きがもつて何の楽しみもよせつけなくなり、はてはぼんやり気抜けして、急死してしまう。誠実すぎる銀行員との結婚生活は銀行員の急死によりあっけなく幕が下ろされるが、ランカシャーの夫については後日談が用意されている。

モルは肉体の衰えとともに結婚市場から退場するが、先述した貧困に怯えるあまり、軸足を窃盗生活に移す。ランカシャーの夫との間にできた子供を里子に出す時に世話になった産婆の取り成しで巧妙に法の網を掻い潜ってきたモルも最後はお決まりのニューゲート監獄入りとなる。しかし獄内で再会したランカシャーの夫（追剥）と繕いを戻し、元夫を説得してふたりしてヴァージニアへ向かう。流刑先のヴァージニアで前夫である弟や、弟との間に生まれた息子のハンフリーの尽力によりタバコ農園の主人として再生を果たす。つぎの引用は農園主として経済的に自立できたモルが夫のために産婆（今は女将）に依頼してロンドンから取り寄せた品物である。

これで私と夫の用いるあらゆる種類の衣服を取り寄せました。特に私は夫が欲しがっているようなものは何ひとつ残らず買い入れるよう気を配りました。例えば上等な長い毛のかつらふたつ、銀の柄のついた剣2ふり、鳥撃ち銃3、4丁、皮袋とりっぱなピストルがついている鞍、それに緋色のマントなど、要するに、彼が有難がるもので、彼をりっぱな紳士（事実彼はそのとおりなのですが）に仕立て上げるようなものを残らず取り寄せたのです。（*Ibid*, p. 424）

結 論

ランカシャーの夫を紳士らしく仕立て上げる準備はこれで整ったわけである。しかしいくら農園主の体を備えてみても、当時のヴァージニアはイギリスの流刑植民地にすぎない。つぎにジャックとシングルトンに触れておきたい。ジャックとシングルトンは国外では一見アイデンティティを確立し、陰画的な存在を脱したかに見える。しかし帰国すればネ

ガティヴな表象は免れない。シングルTONは結婚にこぎつけても「ホーム」は見出せない。ジャックは「間男」されるだけではすまず、結婚は4回目を除き、ことごとく不首尾に終わる。こうなると国外での彼らの活躍に疑問符を付けざるを得なくなる。つまり、ヨーロッパ以外はヨーロッパによる地図化を待つ処女地にすぎず、モル的な紳士・奥方レベルならいくらでも輩出可能な地ということであろうか。最後に考えてみたいのは国内組を主にしたモルの結婚相手である。まず指摘できることはモルの周りに出没する男性はその多くが家庭崩壊者であり、ひ弱で誠実すぎることである。国内に留まり、イギリス・ブルジョア社会でそれなりに居場所を確保できても、イギリス・ブルジョア社会という舞台上では居心地が悪そうである。それすら叶わない輩は呉服屋のように紳士と庶民の間を両生類のように這いずり回る以外にすべはない。

結論的に言えば、デフォーは上述した人物たちの生き様を描きつつもそこにプラス面を認めず、ネガティヴな表象に終始したということである。

主要参考文献

- Defoe, Daniel. *The Life, Adventures, and Piracies, of the Famous Captain Singleton*. Oxford University Press, 1990.
- . *The History and Remarkable Life of the Truly Honourable Col. Jacques Commonly Call'd Jack*. Oxford University Press, 1989.
- . *Moll Flanders*. Penguin Books, 1989.
- . *A Journal of the Plague Year*. Norton & Company, 1992.
- . *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. Oxford University Press, 1981.
- . *The Farther Adventures of Robinson Crusoe*. William Clowes & Sons Ltd., 1974.
- Dickens, Charles. *Christmas Books*. Oxford University Press, 1974.

- Gregg, Stephenson H. *Defoe's Writings and Manliness*. Ashgate, 2009.
- Guilhamet, Leon. *Defoe and the Whig Novel*. University of Delaware Press, 2010.
- Maniquis, Robert and Fisher, Carl, (eds). *Defoe's Footprint*. The University of Toronto Press, 2009.
- Richetti, James. *The Life of Daniel Defoe*. Blackwell Publishing, 2005.
- Sutherland, James. *Daniel Defoe, A Critical Study*. Harvard University Press, 1971.
- Thackeray, W. M. *Vanity Fair*. Norton & Company, 1994.
- Todd, Dennis. *Defoe's America*. Cambridge University Press, 2010.
- 榎本太、『十八世紀イギリス小説とその周辺』、日本図書刊行会、2005年。
- 仙波豊ほか編、『未分化の母体 十八世紀英文学論集』、英宝社、2007年。
- 竹村和子、『文学力の挑戦』、研究社、2012年。
- 富山太佳夫、『文化と精読』、名古屋大学出版会、2003年。
- 正木恒夫、『植民地幻想』、みすず書房、1995年。
- エンゲルハルト・ヴァイグル著、三島憲一訳、『近代の小道具たち』、青土社、1990年。
- ジャン・スタロピンスキー著、小西嘉幸訳、『自由の創出：十八世紀の芸術と思想』、白水社、1989年。
- ジョージ・L・モッセ著、細谷実ほか訳、『男のイメージ 男性性の創造と近代社会』、作品社、2005年。
- デイヴィッド・デイビディーン著、松村高夫・市橋秀夫訳、『大英帝国の階級・人種、性』、同文社、1992年。

